三歳児の集団生活への適応について

研究第5部　望月武子
〃　丸尾あき子
〃　住吉玲子
愛育幼稚園

Ⅰ 目　的

集団生活への参加は，幼児の発達における一つの大きな転換期ということができる。そして，集団への適応の問題は，場としての幼稚園（保育所）にとっても，参加する子どもにとっても重大な課題となる。適応の良否は子どもを受け入れる側の態勢や保育者の力に負う所が大きいが，同時に，子どもの先行経験としての家庭での生活のあり方や親子関係の問題を考えなければならない。そこでわれわれは，初めて集団生活を経験する三歳児について，集団生活への適応状態を観察するとともに，これまでの家庭での生活経験や親子関係などとの関連を考察しようとした。

Ⅱ 方　法

1. 対象及び適応状態の評価

愛育幼稚園母と子の教室（週三日保育と週一日保育のグループがある。）に昭和52年度入園した子ども全員を対象にして適応状態を観察した。

観察は，入園後1ヶ月（5月），1学期終了時（7月），3学期終了時（3月）の三時点で，幼稚園生活での子どもの適応状態を三段階評定法により担任（1クラス2名の複数担任制）に評価してもらった。観察項目は別紙のような現象的にとらえやすい20項目で，適応の良い方から2，1，0の得点を与え，点数化の処理を行った。

2. 子どもの行動発達

家庭生活における子どもの経験を知る手がかりとして，運動，生活習慣，対人行動，遊びの領域について各10項目，計40項目の質問を用意し，入園時に母親に回答を求めた。そして，そのような行動ができるという項目にそれぞれ1点を与えて各領域ごとに得点を算出した。

3. 親子関係調査

入園後1ヶ月の時点で，親子関係調査（牛島案：日本総合愛育研究所紀要第8集参照）を行った。

上記の資料から，子どもの集団生活適応にかかわる要因を分析した。

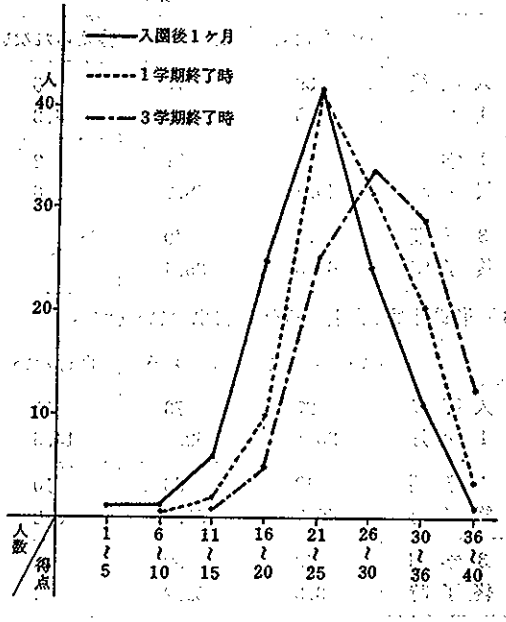
Ⅲ 結　果

1. 集団生活への適応状態

集団生活への適応状態の得点（以下適応得点という）の分布及びその経過を示したものが第1図である。同様に，各観察時点の適応得点の平均値，標準偏差で表わしたものが第1表である。調査内容が一部で具体的行動をとらえているが，相対的評価の部分が多いため得点では大きな差はみられないが，各観察時点で平均値で約3点の上昇がみられる。

これを保育回数別にみると，一日保育に比べ三日保育の方に得点の上昇が大きく一日保育では入園の初期の変化に比しその後の変化はゆるやかになっている。観察時点の間隔が，初めは2か月，次回は8か月とられていることを考え合わせると，この傾向はさらに大きくなる。

第1図　適応得点の分布とその経過



第1表　各観察時点の適応得点の平均値と標準偏差

観察時		全　体	3日保育	1日保育
入園後 1ケ月	平均値 標準偏差	22.7 6,276	23.5 6,181	22.1 6,341
1学期 終了時	平均値 標準偏差	25.8 5,375	27.1 6,242	25.0 4,447
3学期 終了時	平均値 標準偏差	28.9 5,256	31.7 4,439	26.8 4,825

観察項目別に適応状態の経過を検討すると変化の著しいものと，緩慢なものがみられる。変化の著しい項目は第2表に示したものであり，これに対し，先生に親しむ，子どもから先生に話しかける，友だち遊びの中に入る，友だちと協力する，集中性やおちつきがある，などの項目は漸進的な経過をみせている。

第2表　項目別にみた適応の変化

（上段は人数，下段は%）

4）名前を呼ばれた時返事ができますか

	いつも元気に	ふつう	できない
入園後 1ケ月	33 28.2	67 57.3	17 14.5
1学期 終了時	56 45.9	57 46.7	9 7.4
3学期 終了時	80 70.8	31 27.4	2 1.8

6）先生から話しかければ答えられますか

	いつも元気に	ふつう	答えられない
入園後 1ケ月	39 33.5	73 62.4	5 4.3
1学期 終了時	49 40.2	71 58.2	2 1.6
3学期 終了時	73 64.6	40 35.4	

8）集団場面で先生の話をよく聞いていますか

	いつもよく	ふつう	聞けない
入園後 1ケ月	27 23.1	73 62.4	17 14.5
1学期 終了時	49 40.2	63 51.6	10 8.2
3学期 終了時	49 43.3	59 52.2	5 4.4

9）集団的課題や指示によく応じますか

	いつもよく	ふつう	はずれる
入園後 1ケ月	24 20.5	74 63.2	19 16.3
1学期 終了時	38 31.1	72 59.0	12 9.8
3学期 終了時	59 52.2	51 45.1	3 2.7

11）友だちに話しかけたり誘いかけたりして遊びますか

	いつも	ふつう	誘いかけない
入園後 1ケ月	13 11.1	52 44.4	52 44.4
1学期 終了時	19 15.6	75 61.5	28 22.9
3学期 終了時	35 31.0	69 61.1	9 8.0

14）順番が守れますか

	いつも守る	大体守る	守れない
入園後 1ケ月	9 7.7	100 85.5	8 6.8
1学期 終了時	18 14.8	100 82.0	4 3.3
3学期 終了時	42 37.2	69 61.1	2 1.8

16）靴，持物などの始末ができますか

	よくできる	ふつう	できない
入園後 1ケ月	42 35.9	62 53.0	13 11.1
1学期 終了時	57 46.7	61 50.0	4 3.3
3学期 終了時	65 57.5	47 41.6	1 0.9

18）絵画製作など技能的な問題がありますか

	問題なくよくできる	ふつう	劣る
入園後 1ケ月	9 7.7	104 88.9	4 3.4
1学期 終了時	20 16.4	100 82.0	2 1.6
3学期 終了時	42 37.2	68 60.2	3 2.7

2. 適応状態とその要因

適応状態と入園前の生活経験や親子関係調査との関連を検討するため，各観察時点の適応得点の平均値と標準偏差を基準にして，集団生活での適応状態を三段階のグループに分けた。各グループの人数及び分布率は第3表の通りである。そして，この上位群と下位群について各要因との関連を検索した。

第3表　適応状態のグループわけ

観察時＼適応	上位群	中位群	下位群
入園後	16人	85	17
1ケ月	13.6%	72.0	14.0
1学期	17	85	15
終了時	14.5	72.6	12.8
3学期	19	76	18
終了時	16.8	67.3	15.9

1) 適応状態と子どもの行動発達

入園前の生活経験を知る手がかりとして，運動，生活習慣，対人行動，遊びの領域での行動発達をとらえたが，その結果は第4表の通りであった。

第4表　子どもの行動発達得点

	得点の最低・最高	平均値
運動	1 ～ 10	6.8
生活習慣	4 ～ 10	7.7
対人行動	3 ～ 10	7.5
遊び	4 ～ 10	7.8

各観察時点の適応上位群と下位群について，行動発達の得点を比較したものが第5表である。各時点を通じて適応上位群では行動発達の得点が高くなっており，家庭における生活経験の豊かさが集団生活適応に好影響を及ぼすことが明らかである。特に，1学期終了までの時点ではその傾向が著明であり，有意差が認められる領域が多い。(表中の＊は有意差あり)

しかし，1学期終了後，3学期終了時と経過するに従って，入園前の行動発達との関連は運動の領域を除き次第に薄れている。このことは，三歳児の場合，入園前の経験の差が集団生活への適応に持続的な影響を及ぼすほど大きいものではないということであろうか，再検討を要するところである。

第5表　適応上位・下位群の行動発達得点

観察時＼適応	入園後1ケ月		1学期終了時		3学期終了時	
	上位群	下位群	上位群	下位群	上位群	下位群
運動	7.3*	6.2	7.7*	6.4	7.4*	5.9
生活習慣	8.0	7.2	8.5*	7.1	7.9	7.5
対人行動	8.3*	6.4	8.6*	7.1	8.1	7.1
遊び	8.3*	7.2	8.2	7.6	8.0	7.3
計	31.9*	26.9	32.9*	28.3	31.3	27.9

2) 適応状態と親子関係調査

親子関係調査は，支配―自律，愛情面の暖かい―冷たい，不安の三つの軸から構成されており，得点処理を行うが，その結果は第6表の通りである。標準化された時の三歳児の基準と比べ大きなかたよりはみられない。

第6表　親子関係調査の得点

	得点の最低・最高	平均値	標準偏差
Ⅰ 支配的因子	2 ～ 21	11.7	3.35
Ⅱ 愛情因子	7 ～ 23	14.0	2.99
Ⅲ 不安因子	2 ～ 26	11.6	4.97

各観察時点の適応上位群と下位群について，親子関係調査との関連をみたものが第7表である。(表の数字は得点の平均値を示す)

第7表　適応上位群と下位群の親子関係調査得点

観察時＼適応 親子関係因子	入園後1ケ月		1学期終了時		3学期終了時	
	上位群	下位群	上位群	下位群	上位群	下位群
Ⅰ 支配的因子	11.69	10.82	12.53	10.80	13.47	11.89
Ⅱ 愛情因子	14.44	13.41	14.18	14.93	13.84	15.00
Ⅲ 不安因子	9.75	13.53*	9.53	12.53*	11.05	12.56

支配―自律及び愛情の軸では，適応上位群と下位群の間に得点の大きな差はみられないが，不安の軸では適応下位群に得点が高い傾向が認められる。この傾向は入園当初に大きく，3学期終了時点ではほとんど差がなくなっている。これは，親子関係が固定的なものでなく，子どもの発達や状態により変化する部分があり，入園当初の親子関係の影響が持続的に表われるとは考えられないから当然のことであろう。しかし，いずれにしても親の不安傾向は子どもの集団適応にマイナスの影響を及ぼすということはできる。

3) 保育回数

母と子の教室では週三日保育のグループと週一日保育のグループがあるが，適応状態の経過を保育回数別にみたものが第8表である。三日保育の群では一日保育群に比べ適応のよいものの割合が目だって多く，下位群の割合は少ない。また，三日保育群では各観察時点を通じて，次第に適応上位群の割合が増加しており，逆に，一日保育群では下位群の割合が増加し，三日保育群の保育効果が大きいことを示している。

第8表　保育回数と適応状態

観察時 / 適応	入園後1ヶ月		1学期終了時		3学期終了時	
	3日保育	1日保育	3日保育	1日保育	3日保育	1日保育
＋2～＋1	16人 32.7%	16 22.9	17 34.7	17 25.0	27 56.3	10 15.4
0	22 44.9	35 50.0	22 44.9	31 45.6	15 31.3	26 40.0
－1～－2	11 22.4	19 27.1	10 20.4	20 29.4	6 12.5	29 44.6
計	49人	70	49	68	48	65

4）生活年齢

三歳児においては，生活年齢の差が適応状態に影響するところが大きいと考え，4月から9月までに出生したもの，10月から3月までに出生したものにわけ適応状態との関係をみた。第9表に示した通り，4月から9月に出生した月齢の大きいものの方に適応状態がよいものの割合が多く，月齢の小さい群と明らかな差が認められた。そしてこの傾向は3学期終了時までに持続している。このことから三歳児の集団への適応の良否は生活年齢との関係が大きいことが明らかである。

第9表　生活年齢と適応状態

観察時 / 適応 / 生れ月	入園後1ヶ月		1学期終了時		3学期終了時	
	4月～9月	10月～3月	4月～9月	10月～3月	4月～9月	10月～3月
＋2～＋1	21人 34.4%	11 19.0	22 36.7	12 21.1	23 40.4	14 25.0
0	33 54.1	24 41.4	31 51.7	22 38.6	22 38.6	19 33.9
－1～－2	7 11.5	23 39.7	7 11.7	23 40.4	12 21.1	23 41.1
計	61人	58	60	57	57	56

5）性　差

適応状態の経過を性別でみたものが第10表である。女子に比べ男子に適応段階の低いものの割合が多く，各観察時点を通じ女子の方が適応がよい傾向がみられる。

6）同　胞

きょうだい構成と適応状態との関連をみたものが第11表である。入園後1ヶ月の時点では末子に適応段階の低いものが多くみられるが，次第に適応がよくなり3学期終了時には，一人子，長子と比べむしろよい適応状態を示している。これに対し長子では3学期終了時に適応段階の低いものが多くなり，対照的な傾向をみせている。

第10表　性別・適応状態

観察時 / 適応 / 性別	入園後1ヶ月		1学期終了時		3学期終了時	
	男	女	男	女	男	女
＋2～＋1	15人 26.8%	17 27.0	14 25.9	20 31.7	16 29.6	21 35.6
0	21 37.5	36 57.1	23 42.6	30 47.6	16 29.6	25 42.4
－1～－2	20 35.7	10 15.9	17 31.5	13 20.6	22 40.7	13 22.0
計	56人	63	54	63	54	59

第11表　きょうだい構成と適応状態

観察時 / 適応 / 同胞	入園後1ヶ月			1学期終了時			3学期終了時		
	一人子	長子	末子	一人子	長子	末子	一人子	長子	末子
＋2～＋1	人 11 % 26.8	8 28.6	13 27.7	14 34.1	8 29.6	10 21.7	12 32.4	7 25.0	17 37.8
0	22 53.7	16 57.1	16 34.0	16 39.0	13 48.1	24 52.2	13 35.1	9 32.1	17 37.8
－1～－2	8 19.5	4 14.3	18 38.0	11 26.8	6 22.2	12 26.1	12 32.4	12 42.9	11 24.4
計	人 41	28	47	41	27	46	37	28	45

この理由は明らかではないが，家庭内で赤ちゃん扱いされていた末子が，集団生活参加を機に，生活の領域や経験が拡大されるためであろうか。

7）適応の変化

個々の子どもについて，1学期終了時と3学期終了時の適応得点の差を算出し，これを適応の変化とみた。この変化量を5段階に区分し各要因との関連をみたものが第12表である。

第12表　適応の変化量と各要因

適応得点の変化	保育回数		年齢		性別		同胞		
	3日保育	1日保育	4月～9月生	10月～3月生	男	女	一人子	長子	末子
＋2～＋1	人 16 % 33.3	11 17.2	9 15.8	18 32.7	12 22.6	15 25.4	5 13.5	5 18.5	17 37.8
0	24 50.0	29 45.3	30 52.6	23 41.8	24 45.2	29 49.2	21 56.8	11 40.7	20 44.4
－1～－2	8 16.6	24 37.5	18 31.6	14 25.4	17 32.1	15 25.4	11 29.7	11 40.7	8 17.7
計	人 48	64	57	55	53	59	37	27	45

保育回数でみると三日保育に，年齢でみると生れ月の10月～3月までの月齢の小さいグループに，きょうだい構成では末子に適応的変化の大きいものが多くみられ，これらに保育効果が大きい。

以上を総括的にみると，入園前の生活経験の差は入園当初の集団への適応状態に影響が大きく，また，親子関係調査における母親の不安傾向は子どもの集団生活適応にも悪影響を及ぼすことが明らかである。しかし，これらの影響は1学期終了時，3学期終了時と集団生活経験が長くなるにしたがって薄れていく傾向をみせており，長期間にわたり強く持続的な影響を及ぼすことは少ないといえそうである。これは子どもの年齢が小さいだけに，集団生活参加後の生活の影響を受けやすいためであろうと考えられる。ただ一つ運動領域の発達の差は，3学期終了時まで適応状態との関連をみせており，三歳時点における適応の良否にかかわる要因として見逃すことができない領域であるといえる。

この他，適応状態の良否は，生活年齢及び保育日数との関連が大きく，月齢の大きいもの，三日保育を受けているものに適応のよいものが多かった。

しかし，入園後の適応的変化の大きさからみると，三日保育，月齢の小さい群，末子に変化の著しいものがあり，保育効果がみられている。

調査票1

幼稚園生活の適応状態調査

記入年月日　昭和52年　月　日

（　　組）幼児名（　　）

担任のお子さんの幼稚園の生活について，下記の項目のあてはまるところへ○印をつけて下さい。

1. 喜んで幼稚園に来ていますか……	喜んで来る	ふつう	いやがることがある
2. お母さんからスムーズに離れますか……	離れる	母を気にして，ふり向いたり，離れにくそうにする	離れない，泣く
3. にこにこ楽しそうな表情をしていますか……	楽しそう	ふつう	表情が固い，緊張
4. 名前を呼ばれた時返事ができますか……	いつも元気に	ふつう	できない，声が出ない小さい声でする
5. 先生に対しては親しんでいますか……	親しんで来る	ふつう	近寄ってこない，さける
6. 先生から話しかければ答えられますか……	いつも元気よく	ふつう，もじもじするが答える	答えられない
7. 子どもから先生に話しかけてきますか……	よく話しかける	ふつう	話さない
8. 集団場面で先生の話をよく聞いていますか…	いつもよく聞いている	ふつう	聞けない，席をたったり勝手なことをする
9. 集団的課題や指示によく応じますか……	いつもよく応じる	ふつう	はずれる，勝手なことをする，なじめない
10. 友だちの遊びの中に入っていますか……	いつも	誘われれば入る	入れない，傍観
11. 友だちに話しかけたり誘いかけたりして遊びますか……	いつも	ふつう	話さない，誘いかけない
12. 友だちと協力して遊びますか……	協力する	少数なら遊ぶ	傍観，邪魔する
13. 友だちと物のとりあい，喧嘩が多いですか…	――	ふつう	多い，いつも人に譲る
14. 順番が守れますか……	いつも守る	大体守る	守れない
15. 動作が遅れがちですか……	いいえ	時に	いつも遅れる
16. 靴，持物などの始末ができますか……	よくできる	ふつう	できない
17. 食事，排泄，着脱衣など生活習慣での問題がありますか……	問題なくよくできる	ふつう	問題がある，できないことが多い
18. 絵画，制作，鋏の使用など技能的な問題がありますか……	問題なくよくできる	ふつう	劣る，できないことが多い，やらない
19. 運動能力で問題がありますか……	問題なくよくできる	ふつう	劣る，できないことが多い，やらない
20. 課題，遊びに対し集中性，おちつきがみられますか……	集中する	ふつう	集中できない
○ その他，問題や心配なことがありますか……	ない	ある（　　）	